部局における教育・研究・診療・産学連携・社会貢献・国際化における特筆すべき取組と成果

(1) 特筆すべき教育活動の取組と成果（大学教育改革の支援プログラム（ＧＰ等）の採択状況と取組、グローバルＣＯＥ等の大型プロジェクトの採択・実施状況などを含む。）

（ロシア人学生を対象とする日本・アジア学講座）
2011 年度訪問講座「日本とアジア」を 9 月 19 日-23 日に開催した。ノボシビルスク国立大学東洋学部との取り決めに基づき、第 3 回目の訪問講座を実施した。同大東洋学部の日本語専攻の学生など合計 60 名余が出席した。講師は、東北大学高等教育開発センター佐藤勢紀子教授（日本思想史）とし、「『源氏物語』と仏教思想」を講義した。次いで東北大学総長特別補佐木島明博教授、国際教育院ザンペイソフ・ノルボシン准教授にも参加してもらい同大学において東北大学説明会を開催した。本企画は 24 年度も実施される。

（映像民族誌制作のための実践ビデオ講習会）
高倉准教授は 2011 年年度において、6 月 22 日、7 月 13 日、8 月 24 日、9 月 11 日、10 月 26 日、1 月 25 日の 6 回にわたって文化人類学やその隣接分野でのフィールドワークに必要な映像記録（ビデオ）の撮影・編集に関する理論と実践について、東北アジア研究センター客員研究支援者齋藤秀一氏を講師に招き大学院学生を対象に講習会を行った。

(2) 特筆すべき研究・診療・産学連携活動の取組と成果

（シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット）
このユニットでは、地球温暖化がシベリアの地域社会にもたらす影響分析を、文理連携のアプローチですすめているが、その中間成果として、高倉浩樹編『極寒のシベリアに生きる』（新泉社）としてまとめ 2012 年 4 月に刊行した。文理連携による本邦冊のシベリア地域研究入門でもある。

（シベリア人類学研究）
高倉准教授は、シベリア人類学の関わる研究書『極北の牧畜民サハ――進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』（昭和堂、2012 年 1 月）を刊行した。また弘前大学の曽我亨氏との共著で『シベリアとアフリカの遊牧民』（東北大学出版会、2011 年 12 月）と題する牧畜研究入門書を刊行した。このような出版活動とこれまでの国際的発進力、共同研究の組織化が評価され、大同生命地域研究奨励賞を受賞した（2012 年 7 月）。

（震災研究）
高倉准教授は昨年行った東北大学の学生・教員・職員などの東日本大震災の被災体験と大学の復旧過程に焦点をあてた聞き取り調査に基づく報告書『聞き書き　震災体験ー東北大学９０人が語る 3.11』（共監修者、新泉社、2012 年 3 月）を刊行した。また同様に昨年度実施した宮城県の無形民俗文化財の被災状況についての報告『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査 2011 年度報告集』（共編、東北アジア研究センターシリーズ 5 号、2012 年 6 月）を刊行した。

（環境研究）
石井准教授は 2011 年度に、Elsevier 社が発行している Global Environmental Change 誌に、炭素隔離技術の社会科学的側面（統合的政策とデモンストレーションプロジェクトの社会的学習）を論じた査読付き論文 2 篇を掲載した。同誌は 2011 年の Thomson ISI Impact Factor が 6.868 であり、地理学と環境学でもっとも権威ある雑誌の一つである。

(3) 特筆すべき社会貢献、国際化等の活動の取組と成果

（シベリア人類学研究）

高倉准教授は、2012 年 1 月 17 日から 3 月 1 日に東北大学図書館本館で写真展「北にくらす子どもたち」を開催した。ユーラシアおよび北米大陸の極北世界を調査研究する人類学・言語学者達が、フィールドワークのなかで撮影した民俗写真のうち、とりわけ子どもの写真を集めて紹介した。北海道立北方民族博物館との共催で実施した。さらに、2012 年 3 月 22 日から 24 日には、ロシア連邦サハ共和国エヴェノ・ブィタンタイ郡サクリール（バタガイ＝アリタ）村で「日本人のみたトナカイ遊牧民：シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み」と題する写真展を開催した。この村は高倉浩樹准教授が、1994-1997 年に日本人初の本格的シベリア人類学調査を行った場所で、目的は（１）研究資料としての写真を当地の人々に返却、（２）2008 年にセンターが行った仙台市でのシベリア写真展において、来場者が書いた感想＝「シベリアの手紙」を翻訳し現地に届ける事で、市民の間の文化交流を実施するというものだった。この事業にはセンター客員研究支援者千葉義人氏（デザイナー）も同行し、展示支援をおこなった。このことでエヴェノ・ブィタンタイ郡役場から高倉准教授・千葉氏双方に感謝状が送られた。

（カンボジア地雷除去活動）

2009 年から継続している本事業は 2011 年度も東北大学が開発した 2 台の地雷検知センサをカンボジア政府機関に貸与し、実地雷原での地雷除去活動を実施している。累積で 80 個以上の地雷検知・除去に成功している。

（フィレンツエ大学との共同研究）

栗原市・荒砥沢への GB-SAR 装置の設置に関しては、本センターが世話役として大学間学術交流協定を締結したイタリア・フィレンツエ大学が現地作業に参加した。またデータ解析に関してはフィレンツエ大学に半年間滞在した本学学生がフィレンツエ大学研究者と協力してリアルタイム処理を実施している。一方、2012 年 3 月にはフィレンツエ大学から研究者を招聘し、レーダー技術による遺跡、文化財の保護に関する公開シンポジウムを本センター主催で開催した。

(4) その他、特筆すべき活動等の取組と成果

（部局を超えた教育活動）
高橋陽一助教は学内の文系学生・院生を対象に「古文書講座」を毎週木曜午後に開講している。留学生を含む文学研究科・経済学研究科の院生を中心に約 10 名の受講生が歴史研究の基礎を学びながら、くずし字解読のスキルを習得している。また、東北学院大学・宮城学院女子大学からも受講する学生がおり、学内の連携とともに他大学との交流も成果としてあげられる。

（公募型査読学術雑誌の構築）
東北アジア研究センターの紀要的位置づけであった雑誌『東北アジア研究』を、2011 年度より東北アジア地域研究を牽引するための査読制学術雑誌へと変更し、国内外からの公募をうけつける体制を整えた。これにともない学外の関連研究者とセンター内研究者からなる編集委員会を設けた。その結果、国内外から多数の原稿が集まった。2011 年度は 12 本の論文が受理され刊行された。このうち 8 本が学外研究者であり、そのうち 6 名が国外研究者からの投稿であった。当センターが東北アジア研究を国際的にも先導する体制を整えた。

（「東北アジア研究専書」「東北アジア学術読本」シリーズの創刊）
東北アジア研究に関わる市販の学術専門書を出版するために、「東北アジア研究専書」というシリーズを設け、出版助成する体制を整えた。2011 年度中に 1 号『近現代中国における民族認識の人類学』（瀬川昌久編、昭和堂）、2 号『極北の牧畜民サハ：進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』（高倉浩樹、昭和堂）を刊行した。また東北アジア研究に関わる啓蒙書として東北大学出版会から刊行される「東北アジア学術読本」シリーズを設けた。2011 年度において 1 号『シベリアとアフリカの遊牧民』（高倉浩樹共著）、2 号『東北アジア　大地のつながり』（石渡明共著）を刊行した。このことで国内の幅広い読者層・学術界に研究成果を発信する方策を確立した。